No.17

東京文化資源会議

［ティーチャ］

T-Cha

ニューズレター

東京文化資源会議
Tokyo Cultural Heritage Alliance

Michael Hideyuki Tainaka × Takahiro Nakajima × Mohamed Nazeer

@Tokyo Spiritual Culture Project

身体で感じ感情を豊かにする精神文化の新たな交流の場「崖東夜話」が目指すもの

東京文化資源区は、仏教や神道、儒教、キリスト教やイスラム教関連の多くの精神文化施設が存在する地域です。２０１６年に発足した「湯島神田社寺会堂検討会」、２０１８年から同検討会にて中島隆博（東京大学教授）さんを中心に企画した「社寺会堂塾」を通じて、多様な価値観・宗教観を持った人達の相互理解・文化的理解を促すため、これまであまり接点のなかった各文化施設関係者が集い、互いの宗教観や歴史、今後の地域のあり方について議論を重ねてきました。

精神文化と向き合う「崖東夜話」の実現

「現代において宗教をもう一度考えること」をテーマに議論を重ねるなかで、これからを生きるための精神文化を育む取り組みとして生まれたのが「崖東夜話」です。「崖東夜話は、night of philosophyという夜通しの哲学のお祭りを一つの参考にしてい

NEXT PAGE

ます。それは老若男女、哲学を通してこれからの時代を生きることについて楽しく考え議論する一種のお祭りです。そうしたイベントを、東京という場所でやることに意味があると思いました」と、中島隆博（東京大学教授）さん。

初開催となった昨年は、演奏や声明、儀礼など「音」をテーマにした体験から、トークセッション、シンポジウムと三部構成で実施しました。本年は、昨年同様にコロナ禍のため規模は縮小しつつも、「やすらぎ」をテーマにしたシンポジウムと「音」をテーマにしたプログラムを開催することができました。

宗教間の新たな接点 地域に開かれた場へ

関東大震災や戦後復興における地域のシンボルとして、精神文化施設は地域の人々の心の拠り所でもありました。個々の施設は精力的に活動をしてきましたが、施設間同士のつながりがこれまで十分にあったかというと、意外とそうではなかったようでした。「聖堂拝観以外に、対外的な取り組みにあまり注力していなかった正教会においても、社寺会堂塾や崖東夜話のような機会を通じて、住職や神主など他の宗教の方々との接点ができたことはとても大きい」と語るのは、東京復活大聖堂教会の司祭である対中秀行さん。

ローマ・カトリック教会やプロテスタント諸教会が西ヨーロッパを中心に広がったのに対し、キリスト教が生まれた中近東からギリシャ・ロシア・東欧を中心に広がったのが正教会です。日本には江戸時代末期に、函館のロシア領事館の司祭として来日したニコライによって伝道されました。こうした歴史的な背景やキリスト教の儀礼を、崖東夜話では知っていただく機会となりました。

「キリスト教は欧米文化だと思っている人は多いが、正教会は欧米文化とは違ったもの。伝道者であるニコライ自身も、日本人の仏教や神道などの宗教心を理解し、日本人に合った宗教として布教活動を行ってきた歴史がある」（対中さん）

御徒町にモスクを構えるのは、イスラム教のアッサラームファンデーションです。日本ではイスラム世界との直接的な接点の歴史は短く、イスラム教への理解は十分とは言えません。一方、世界のイスラム教人口を見ると中東のみならず東南アジアにも広がっています。また、諸外国へ旅行した際、日本人の多くもモスクを観光地として訪れるなど、日本を含むアジア諸国とイスラム教文化は実は近しい存在だということが分かります。

「モスクやイスラム文化を通じて、イスラム教について身近に感じてもらえるようにしたい」と、アッサラームファンデーション代表のモハメッド・ナズィールさんは話します。

崖東夜話では、好きな言葉をアラビア語の書道やヘナアート体験など、普段では体験できないイスラム文化を知ってもらう良い機会となりました。

「モスクに来てもらった人達に、イスラム教のことをわかりやすく伝えたい。礼拝堂のマナーもそうですし、施設にいるシェフが腕を振るった料理やお菓子を振る舞っている。崖東夜話などを通じて他の宗教施設の方々とつながれたことはとても嬉しく、互いのことをもっと理解したい」（ナズィールさん）

精神と身体で体感 豊かな感情で交流を

崖東夜話は二年連続でコロナ禍での開催であったため、当初の想定よりも制限のなかではあったものの、「地域内に点在する多様な宗教・精神文化施設が連携した企画を実施できたことの意義は大きい」と中島さんは指摘します。また、音楽や儀礼など、身体を使って表現する行為は宗教において重要な点の一つであり、「単純な知識だけではない、身体性を通じて知ることで感情を震わせ精神と向き合うことで宗教に触れることができた」とも話します。

キリスト教やイスラム教の礼拝の際に食事を積極的に振る舞うことにも、身体性を伴う行為です。礼拝をともにした者同士が、同じ釜の飯を食べながら語り合い、交流することで連帯感も生まれます。また、正教会では大きな祭の前には肉を避け質素な食事をする「斎（ものいみ）」という習慣があるとのこと。食べることは宗教的な行為と紐付いたものがあると対中さんは語ります。「ともに食べる」ことは、今後の崖東夜話にとっても精神文化を体感する大きな柱になるかもしれません。

コロナ禍をきっかけに、リモートワークなどで身体性が失われたコミュニケーションが推奨され、それに伴い孤立や孤独の問題も社会課題となってきています。現代における宗教や精神文化を問い直すことは、身体性を取り戻し、他者との感情的な豊かな交流をどう深めることができるのか、を問い直すことでもあると中島さんは指摘します。ナズィールさんも「開いた場所があることで、困っている人、生きることの意味を見出そうとする人の助けになれたら」と宗教施設の意義について語ってくれました。

都市の中心で精神と向き合う 機会と場づくりのこれから

崖東夜話をきっかけに、今という時代、多様な宗教・精神文化施設が集積するこの地域ならではのさまざまな可能性が見えてきました。東京という都市の中心で、今を生きる上での哲学や精神文化について向き合う崖東夜話は、今後、参加者がより積極的・能動的に参加し身体を使った表現ができるプログラムや、夜通しの開催といったよりお祭り感を演出することも実現したい形の一つです。身体性を伴う行為として、演劇なども可能性があるかもしれません。今後、どのような発展をみせるか、ぜひ、みなさんとともに考えていきたいと思います。

（記事構成：江口晋太朗　撮影：鈴木渉）

Michael Hideyuki Tainaka × Takahiro Nakajima × Mohamed Nazeer

T-Cha NOW TOKYO PROJECT

東京文化資源会議では、民産官学の様々な分野の専門家や実践者が集い、
東京の各地域で育まれている様々な文化資源をハード面・ソフト面から活用するプロジェクトを推進しています。
ここでは、東京文化資源会議全体の動向や各プロジェクトの近況をお知らせします。

精神文化を問う 6施設で企画 崖東夜話第二夜

湯島神田上野社寺会堂として、二回目の「崖東夜話」が10月22日に開催されました。「崖東夜話」とは、文化資源区内の精神文化・宗教施設らによる合同企画で、多宗教が共存する寛容な文化を育んできた湯島神田上野地域において、特に、コロナ禍がもたらした新たな社会的な危機に対して、人びとの心の拠りどころである精神文化・宗教が果たしうる役割について語り合うことを今回は目的としました。

第一部では、「やすらぎ」をテーマに、現代社会における孤立やつながりの重要性、新しい時代の精神文化の役割について、専門家や宗教化らが垣根を越えて議論しました。

第二部では、6施設による同時開催にて、6つの文化・宗教施設それぞれで、『音』を介して精神文化・宗教の存在に緩やかにふれる体験型のイベントを実施しました。声明や儀礼など、身体的な行為を通じて精神文化に触れる機会となりました。コロナ禍において「音」や「身体性」との関わりが薄くなった現代において、こうした行為を通じて、私たち自身を見つめ直す一つの機会となったのではないでしょうか。

昨年の一回目、本年の二回目と、ともにコロナ禍における開催であったため色々と制約がありながらでの開催となりました

が、二回の開催を踏まえ、次回以降や今後の展開についても引き続き検討会で議論してまいります。

社寺会堂 マスタープラン 策定調査

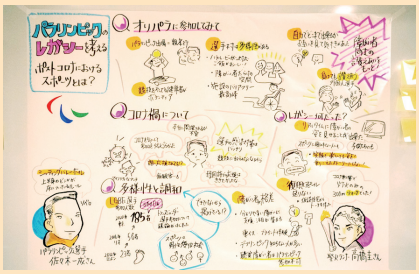
2045年の文化資源区について考える社寺会堂マスタープラン「いきている街2045(仮題)」の策定に、地図ファブプロジェクトの真鍋座長以下3名が協力しています。

コロナ禍で実地調査が難しい状況の中ではありますが、少人数のグループで文化資源区を端から端まで歩き回り、25年後にも変えずに残したい場所、新たなコンセプトを加えることでさらに魅力が増す場所などをピックアップしています。具体的なポイントとして12の場所を選定し、2045年の姿をデザインしています。

来年度までに、マスタープランの全体を把握できる地図と、12地点のデザイン画の公開を予定しています。乞うご期待ください。

オリパラ後 スポーツ文化の 可能性を議論

スポーツ文化資源プロジェクトチームでは、2021年11月20日に、Mace千駄ヶ谷で「東京2020日本代表佐々木一成選手と語ろう「パラリンピックのレガシーを考える：ポストコロナにおけるスポーツとは？」を実施しました。



前半は、シッティングバレーボール日本代表としてパラリンピックに出場された佐々木一成さんと、パラリンピック聖火ランナーとして参加された高橋圭さんによる対談形式で、今大会の舞台裏の様子や「ウィズコロナのパラリンピックにみるスポーツの新しい姿」についてお話いただきました。

後半のワークショップでは、アスリートだけでなく運営スタッフやボランティアなど大会関係者、視聴者など、参加者それぞれの立場から東京2020オリパラの経験を共有し、今大会の「レガシー」を議論しました。こうした振り返りを通じて、東京2020オリンピック・パラリンピックを「コロナ禍による例外状況」として忘れ去るのでなく、かつてない経験から新しいスポーツ文化の可能性を考える機会となりました。

これからの上野 調査で深掘り 地域連携を探る

上野公園の夜間活用を含めた地域連携を推し進める上野ナイトパークコンソーシアムでは、各文化施設や地域の商店街などの関係各所に対するヒアリングや、上野公園の利用状況についてのネット調査を行いました。

調査やヒアリングを通じて、改めて上野公園の可能性や課題が見えてきました。調査内容やヒアリングをまとめた内容を踏まえて、コンソーシアムとしての今後の展開の方向性を定めてまいります。また、関係各所や台東区をはじめとした自治体連携を図り、上野地域全体における取り組みへと展開していきたいと考えています。

T-Cha NOW TOKYO PROJECT

日本全国の文化資源つなぐ可能性を議論

東京文化資源会議設立と同時に発表した『東京文化資源区構想報告書』をもとに展開してきた活動を踏まえ、今後の発展のため全国的な文化資源活用とそのための制度改革を視野に入れた構想『旨味都市の文化創生―列島ビジョン2030』を策定しました。11月26日に開催したシンポジウム「ポスト五輪・ポストコロナの東京ビジョン―旨味都市の文化創生」では、これらをもとにポストコロナ時代の日本における文化資源活用の展望について議論しました。

高野之夫豊島区長によるビデオメッセージ後のパネルディスカッションでは、伊藤滋東京文化資源会議会長、吉見俊哉東京文化資源会議幹事長、グランドレベル代表 田中元子氏、カルチャースタディーズ研究所代表 三浦展氏らをゲストに、ポストコロナ社会における東京ビジョンについて議論が交わされました。

「文化資源」という考え方は、東京のみならず地方都市においても重要であるという議論のもと、コロナ禍を経て、改めて日本社会における文化の重要性、それらを維持・利活用していくための体制づくりや価値観のシフトなどについて意見が交わされました。さらに、東京文化資源会議が、東京のみならず、日本全国の文化資源を発掘していくためのネットワークを構築すべきという意見が飛び交うなど、全国的な文化資源活用と今後の展開について活発な意見交換を通じて、東京文化資源会議の今後の方向性について考える機会となりました。

編集後記

庭の紅葉が赤く染まった様子を毎年Facebookにて報告させていただいているのですが、今年は危うく逃すところでした。季節の移ろいは早いもの。忙しい毎日の中に、ふと季節を感じる場面に気付ける余裕を持っていたいものです。目を見張るように鮮やかな景色で迎えてくれる名所の紅葉を楽しむのも良いのですが、下町の路地裏に入った場所にひっそりと、しかし力強くその紅を主張する一振りの紅葉の枝というのも私はとても好きです。粋な江戸の文化の継承を感じさせてくれます。身近な文化を見つけるために少し息抜き散歩はいかがでしょうか。（陸）

季節は秋から冬へと移り変わり、肌寒い日々となりました。21年は皆さんにとってどんな年だったでしょうか？コロナ禍で環境や状況が変わるなか、足下にある生活を見直した時期だったかもしれません。家での過ごし方や家族や友人との貴重な語らいなど、「やすらぎ」について年の瀬のタイミングに向き合ってみませんか？自分にとって居心地の良い状況を作ることから何事も始まるはずです。（江）

T-Cha

［ティーチャ］東京文化資源会議ニューズレター　No.17
渋み、旨み、味わいのある東京の文化資源的エキスを3ヶ月に一度、お届けします。

編集：東京文化資源会議広報委員会　デザイン：渋井史生(PANKEY inc.)　執筆：江口晋太朗(TOKYObeta Ltd.)
写真：鈴木渉　印刷・製本：スターツ出版株式会社　発行人：東京文化資源会議　発行日：2021年12月31日
〒110-0005　東京都台東区上野2-11-1藤井ビル3階　TEL：03-5244-5450　MAIL：info@tcha.jp　URL：http://tcha.jp/

T-Cha